

## コロナ禍における3歳未満児保育に関する研究 ～実態調査から見てくるもの～

|       |        |                 |
|-------|--------|-----------------|
| 研究代表者 | 岩橋 道世  | （こども園るんびにい副園長）  |
| 共同研究者 | 平山 猛   | （さざなみ保育園園長）     |
|       | 隈崎 哲也  | （太陽の子鹿島こども園園長）  |
|       | 菊地 義行  | （境いずみ保育園理事長）    |
|       | 只野 裕子  | （こども園あおもりよつば園長） |
|       | 福澤 紀子  | （こども園つるた乳幼児園園長） |
|       | 永田 久史  | （第2 聖心保育園園長）    |
|       | 田和 由里子 | （春日こども園園長）      |
|       | 田口 侑平  | （和田愛児園副園長）      |
|       | 東口 房正  | （こども園ふじがお幼稚園園長） |
|       | 椛沢 幸苗  | （中居林こども園理事長）    |
|       | 坂崎 隆浩  | （こども園ひがしどおり理事長） |
|       | 齋藤 奈緒美 | （中央保育園主任保育士）    |
|       | 矢藤 誠慈郎 | （和洋女子大学教授）      |
|       | 北野 幸子  | （神戸大学大学院教授）     |

### 研究の概要

乳幼児の発育や発達には、その子が育つ環境が大きく関与している。それにもかかわらず、今回の新型コロナウイルス感染症が大流行し、行動制限やソーシャルディスタンス、マスク着用など、今までになかったものを急に取り入れなければならないという大きな環境の変化があった。そのような中、保育所等において、これまでの保育や子どもの育ちから変化があったのか、なかったのかについて、私たちの研究グループに所属する保育所、認定こども園の職員に実態調査を行い、その結果を分析した。なぜならそれは新たな時代への対応した保育がみえてくるのではないかと考えたからだ。今回の研究により、制限下での保育について、日頃大切にしている保育についてはあまり変化が見られなかったが、感染症に対応した保育については工夫を行っていたことがわかった。保育者は子どもの育ちなどについて、コロナ禍前と今とでは、ほとんどの場面でおおよそ半数が変化なしという結果がでている。しかし、今回の感染症での制限が課せられた保育については、なんらかの変化があったという結果がみられた。コロナ禍であろうとなかろうと保育者は、専門家として変わらない保育と、制限がある中での臨機応変に対応している保育を行っているという実態がみられた。

キーワード：コロナ禍、保育現場の工夫と変化、マスク着用、感染対策

## I 研究の目的と背景

### 1. 目的と意義

本研究の目的は、コロナ禍での3歳未満児の保育における保育者の関わりと子どもの育ちについて実態を把握することを通じて、コロナ禍以降における保育の変化を明らかにし、今後の保育実践の在り方

について提言することである。

当研究グループは、今まで保育環境に対しての研究結果から3歳未満児にとって、いかに人的環境、物的環境の在り方が重要であるかを導き出すことができた。特に、3歳未満児の時期、アタッチメントを基本に据えた直接的な関わりとしての言葉かけや、顔の表情、また間接的な関わりとしての生活や、遊

びの環境がより良い発達援助となるという観点から、有効な刺激として欠かせないものであることを検証してきた。

しかし、2020年以降の新型コロナウイルス感染症による社会環境の変化は、乳幼児の生活環境に大きく影響を与えていると考えられる。保育者は、このような中、乳幼児の集団保育という現場においては、日々感染対策を行いつつも、保育環境を工夫し、個々の子どもの育ちに向き合っている。

特に3歳未満児の保育環境は、コロナ禍以前に比べて大きく変化していると言える。とりわけ保育者が「生命の保持」への責任を優先してマスクを着用し、子どもと関わることにより、食事、排泄、衣類の着脱、身の回りを清潔にすることなどへの援助や、遊び場面におけるコミュニケーション等に、何らかの変化が生じていることが推察された。感染拡大の中で正解がなかなか見えず、不安の中で手探りの保育を余儀なくされている保育現場の実態を客観的に把握することで、コロナ禍における保育の今後の在り方への有益な示唆が得られると考える。

## 2. 先行研究について

新型コロナウイルス感染症に関する子どもの環境や発達に関して様々な研究がなされている。

私たちの研究に先立ち、「保育者のマスク着用が、子どもとのコミュニケーションに及ぼす影響について」、「コロナ禍が幼児の日常生活ならびに健康に与える影響」、「愛知県三河地域の新型コロナウイルス感染症影響下における保育の実態」、「保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討」、「子どもの生活に関するアジア8か国調査2021」、「乳幼児施設における新型コロナウイルス感染症対策と室内環境の調整」といった調査・研究を参照させていただいた。

調査概要として、コロナ対応をしながらの保育の在り方についての考察、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響による幼児の睡眠、食事、運動・遊び等の変化についての検討、今後必要とされる新型コロナウイルス感染症への対応策を考えるための基礎的資料づくり、保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響の実態、コロナ禍の中においても“ハッピー&レジリエント(Happy and Resilient)”な子どもを育むための環境の在り方、新型コロナウイルス感染症対策及び室内環境の調整方法の実態把握にスポットをあてたものであった。

以上のような先行研究を踏まえながら、私たちの研究グループでは3歳未満児の保育について、具体的な園での生活について実態調査を行った。

## II 調査の概要と結果

### 1. 調査方法

私たちの研究グループ（保育総合研究会）の会員園へ質問用紙を作成し送付した。

設問は（1）人的環境について3問、（2）物的環境について4問、（3）保育環境（保育スキルアップ、資質向上）5問の計12問とした。保育場面を設定した設問と、全体として回答を求める設問を想定した。保育場면을登園時、主活動（午前中に行われる主な活動のこと）、食事、排泄、睡眠、室内遊び、外遊び、散歩、行事、降園時の10項目設定し「これまでどおり」「うれしい変化があった」「心配・不安な変化があった」から選択することにした。なお、全体としての回答は、業務の変化に関する設問である。また、設問ごとに自由記述欄を設け、実際の活動におけるエピソードや状況について記入できるようにした。

#### 設問一覧

##### （1）人的環境について

- ①子どもの興味、関心、探求心に変化があったか
- ②保育者と子どもと応答的な関わりに変化があったか
- ③保育についての職員間での情報共有（時間、場所、方法、内容など）に変化があったか

##### （2）物的環境について

- ①保育者が行う物的環境の設定（おもちゃなどの準備や片付けの方法）に変化があったか
- ②保育者が行う物的環境の設定に変化があったか
- ③物的環境を通した子どもの育ちに変化があったか
- ④子どもが集中して遊びこむ姿に変化があったか

## （3）保育環境について

- ①子どもとのコミュニケーションの取り方に変化があったか
- ②子どもの行動に対して言葉のかけ方や使用する言葉の種類に変化があったか
- ③子どもの言葉を引き出すときの言葉以外の動作やジェスチャー等に変化があったか
- ④子どもの育ちの記録（方法・内容・手段）に変化があったか
- ⑤保育技術の学び方に変化があったか

※（1）③、（3）④については場面ごとではなく「1日を通して」とした。

※（3）⑤については「園内研修」「園外研修」「会議等」の3つの場面を設定した。

## 2. 結果と内容

## （1）回答状況

会員園99施設のうち回答数は35施設、回答クラス数は合計90クラスで、0歳児クラス、1歳児クラス、2歳児クラス、混合クラス（0、1歳児）、その他（園長、副園長）から回答があった。回答の結果については、クラス、園長等、設問別に集計した。また、自由記述の回答については年齢ごとにまとめた。

表1 回答クラスの内訳

|      | 0歳児クラス | 1歳児クラス | 2歳児クラス | 混合クラス | 合計 |
|------|--------|--------|--------|-------|----|
| クラス数 | 26     | 24     | 30     | 10    | 90 |

## （2）集計結果

設問への選択を「変化なし」「肯定的な変化」「不安な変化」「両方の変化」「無回答」のうち、無回答を除く全体の傾向は表2の通りである。

表2 回答傾向

|        | 変化なし  | 肯定的な変化 | 不安な変化 | 両方な変化 | 合計    |
|--------|-------|--------|-------|-------|-------|
| 内訳数    | 5,341 | 1,226  | 1,101 | 241   | 7,909 |
| 構成比(%) | 67.5  | 15.5   | 13.9  | 3.0   | 100.0 |

また、回答結果は図1のとおりである（別添資料図1-1～1-12）。

図1は保育場面ごとの回答を並べたもので、各クラスおよび園長等の回答傾向をみることができる。

また、設問の内容を（1）コロナ禍における子どもの実態、（2）コロナ禍における援助の工夫、（3）保育業務の変化や工夫の3つに分けて集計した（表3）。

表3 3つの視点によるグループ分け〈〉内は設問番号

- （1）コロナ禍における子どもの実態
  - i）子どもの興味、関心、探究心〈（1）①〉
  - ii）物的環境を通した子どもの育ちの姿〈（2）④〉
  - iii）子どもが集中して遊びこむ姿〈（2）③〉
- （2）コロナ禍における援助の工夫
  - i）物的環境の設定〈（2）②〉
  - ii）コミュニケーションの取り方〈（3）①〉
  - iii）保育者と子どもとの応答的関わり〈（1）②〉
  - iv）言葉かけに使用する語彙の変化〈（3）②〉
  - v）言葉以外の動作の変化〈（3）③〉
- （3）保育業務の変化や工夫〈記録や研修、学び方等〉
  - i）保育者が行う物的環境の変化（準備、片付け等）〈（2）①〉
  - ii）記録の変化〈（3）④〉
  - iii）情報共有の方法〈（1）③〉
  - iv）保育技術の学び方〈（3）⑤〉

自由記述については、回答に見られる頻出語に注目して、実践における保育者の考えや取組の状況を把握した（表4）。さて、集計結果を概観して明らかになったことに次の2点が挙げられる。1点目は各クラスの共通なものとして、コロナ禍における変化がなかったと回答した割合が過半数を超えるものが多かったこと、2点目に比較的人との関わりが多い項目に変化が多くみられたことである。変化の大きかった項目としては、「主活動」「食事」「室内遊び」が挙げられており、「登園時」「行事」も多くのクラスで変化がみられた。

表4 クラスごとの回答で変化が多くみられた項目

| クラス    | 項目  |     |      |      |    |
|--------|-----|-----|------|------|----|
| 0歳児クラス | 登園時 | 主活動 | 食事   | 室内遊び |    |
| 1歳児クラス | 主活動 | 食事  | 室内遊び | 行事   |    |
| 2歳児クラス | 登園時 | 主活動 | 食事   | 室内遊び | 行事 |
| 混合クラス  | 主活動 | 食事  | 室内遊び | 行事   | 行事 |
| 園長等    | 登園時 | 主活動 | 食事   | 室内遊び | 行事 |

各施設で変化があったと回答された中で過半数を超える項目は表5のとおりである。

変化した内容は肯定的な変化と不安な変化の両方が多くの項目でみられた。なかでも混合保育のクラスでは両方ともあると答えた割合が高いという結果となった。

また、業務の変化に関する項目については各クラスともに肯定的な変化の割合が高くなっている。

次に場面毎の各クラスの状況を、回答の全体的な傾向、場面による傾向、自由記述の傾向についてまとめると表6のような結果となった。

10の場面でみられた変化では、前述のように両方の意見がみられるが、回答数でみると、肯定的な変

化が多い項目は主活動と食事で、不安な変化が多いのは、食事と室内遊びである。また、子どもの実態、援助の工夫、業務の変化の質問項目でみると、肯定的な変化の回答数が比較的多いのは、子どもの実態の1(2)③子どもが集中して遊び込む姿、援助の工夫1(2)②物的環境の設定、1(3)②言葉かけに使用する語彙の変化、1(3)③言葉以外の動作の変化、業務の変化1(2)①保育者が行う物的環境の変化である。一方で不安な変化の回答数は子どもの実態1(1)①子どもの興味・関心・探究心、援助の工夫1(1)②保育者と子どもの応答的な関わり、1(3)①コミュニケーションと取り方、で回答数が多くなっている。

表5 肯定的な変化または不安な変化の回答が過半数を超える項目

|        | 肯定的な変化                        | 不安な変化                               |
|--------|-------------------------------|-------------------------------------|
| 0歳児クラス | 登園時、主活動、食事、外遊び、室内遊び、行事、降園時    | 登園時、主活動、食事、睡眠、外遊び、散歩、行事             |
| 1歳児クラス | 主活動、食事、睡眠、室内遊び、行事、降園時         | 登園時、主活動、食事、睡眠、室内遊び、外遊び、行事、降園時       |
| 2歳児クラス | 登園時、主活動、食事、睡眠、室内遊び、外遊び、行事、降園時 | 登園時、主活動、食事、睡眠、室内遊び、外遊び、行事           |
| 混合クラス  | 登園時、主活動、食事、排泄、睡眠、室内遊び、外遊び、降園時 | 登園時、主活動、食事、排泄、睡眠、室内遊び、外遊び、散歩、行事、降園時 |
| 園長等    | 登園時、主活動、食事、睡眠、外遊び、散歩、行事、降園時   | 登園時、主活動、食事、排泄、睡眠、室内遊び、外遊び、散歩、行事、降園時 |

表6 変化内容の選択状況

| 設問ジャンル   | 子どもの実態  |      |      | 援助の工夫   |      |      |      |      | 業務の変化 | 合計    |     |     |
|----------|---------|------|------|---------|------|------|------|------|-------|-------|-----|-----|
| 場面       | (1)①    | (2)③ | (2)④ | (1)②    | (2)② | (3)① | (3)② | (3)③ | (2)①  | 肯定的計  | 不安計 | 両方計 |
| 登園時      | 不安      | 肯定的  |      | 不安      | 肯定的  | 不安   |      | 肯定的  | 肯定的   | 4     | 3   | 0   |
| 主活動      | 不安      | 肯定的  | 肯定的  | 不安      | 両方   | 不安   | 不安   | 肯定的  | 両方    | 3     | 4   | 2   |
| 食事       | 不安      | 肯定的  |      | 不安      | 肯定的  | 不安   | 不安   | 肯定的  | 両方    | 3     | 4   | 1   |
| 排泄       | 不安      |      |      |         | 不安   |      | 肯定的  | 肯定的  | 肯定的   | 3     | 2   | 0   |
| 睡眠       |         |      |      |         | 両方   |      |      |      | 両方    | 0     | 0   | 2   |
| 室内遊び     | 不安      | 肯定的  |      | 不安      | 肯定的  | 不安   | 肯定的  | 肯定的  | 両方    | 4     | 3   | 1   |
| 外遊び      | 不安      | 肯定的  |      | 不安      |      | 不安   | 肯定的  | 肯定的  | 肯定的   | 4     | 3   | 0   |
| 散歩       | 不安      |      |      | 不安      | 不安   | 不安   |      |      | 不安    | 0     | 5   | 0   |
| 行事       | 不安      | 不安   |      | 不安      | 両方   | 不安   |      | 肯定的  | 両方    | 1     | 4   | 2   |
| 降園時      | 不安      |      |      | 不安      | 肯定的  | 不安   | 肯定的  | 肯定的  | 肯定的   | 4     | 3   | 0   |
| その他      |         |      |      |         |      |      |      |      |       | 0     | 0   | 0   |
| 肯定的変化計 a | 0       | 5    | 1    | 0       | 4    | 0    | 4    | 8    | 4     | 26    | 31  | 8   |
| 不安な変化計 b | 9       | 1    | 0    | 8       | 2    | 8    | 2    | 0    | 1     | 26    | 31  | 8   |
| 両方計 c    | 0       | 0    | 0    | 0       | 3    | 0    | 0    | 0    | 5     | 65    |     |     |
| ジャンル計 a  | 6 (6)   |      |      | 16 (19) |      |      |      |      | 4 (9) | 65    |     |     |
| ジャンル計 b  | 10 (10) |      |      | 20 (23) |      |      |      |      | 1 (6) |       |     |     |
| ジャンル計 c  | 0       |      |      | 3       |      |      |      |      | 5     |       |     |     |
| 構成比      | 24.6    |      |      | 60.0    |      |      |      |      | 15.4  | 100.0 |     |     |

※項目の判定は10%以上あり「肯定的」と「不安」の大きいほうを記載。肯定と不安の両方が20%以上の場合「両方」と記載

※( )は「両方」を加えた数



次に、記載された自由記述で場面に関して言及されている内容についてみると、全体ではマスク着用に関することを筆頭に、衛生管理、接触制限、職員研修、情報共有とつづく。マスク着用については、変化の内容では不安な変化に対するものが85%を占めている。また、不安な変化の全体に占めるマスクの割合も45%を超えている。

一方で肯定的な変化に対しては衛生管理や研修において割合が高く、情報共有や業務の徹底に対する言及がみられた。

図2-1 自由記述の内容(全体)

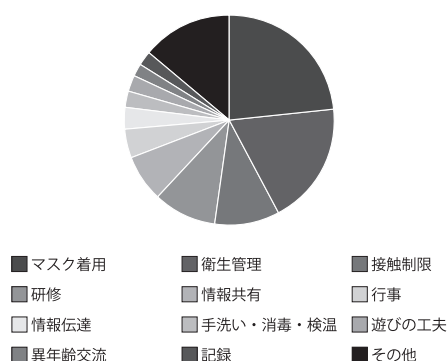


図2-2 自由記述の内容  
肯定的変化(全体)

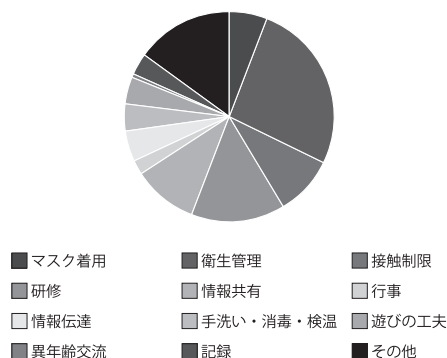
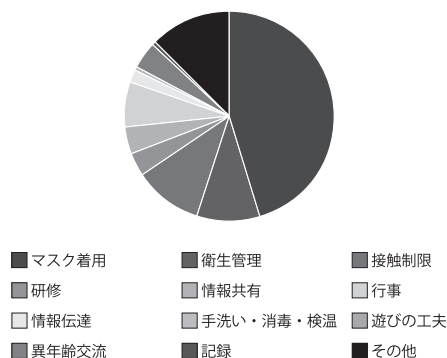


図2-3 自由記述の内容  
不安な変化(全体)



最後に、業務の変化についてみていく（図1-12）。設問内容は（1）③情報共有の方法、（3）④記録の変化、（3）⑤保育技術の学び方の3項目である。なお、（3）⑤は研修場面として、園内研修、園外研修、そして会議等を設定している。

結果は、「変化なし」が6割を超える項目が過半数を占める項目は1つであった。また、肯定的な変化が多くを占め、同時に不安な変化もほとんどの項目に見られた。

自由記述より、オンライン研修の是非について、研修内容によって意見が分かれている。内容としては実践研修に関しては対面がよいが、移動等の時間や参加機会の増加といったメリットが挙げられている。

次に、「コロナ禍における子どもの実態」、「保育者による援助の工夫」、そして「保育業務の変化や工夫」という3つの視点から調査結果を概観する。

### （1）コロナ禍における子どもの実態

#### i) 子どもの興味・関心・探求心〈設問番号（1）①〉

「変化がある」との回答したもののうち半数以上の変化がみられる場面は、0歳児では、肯定的な変化の「主活動」、不安な変化の「行事」「食事」である。1歳児では肯定的な変化の「主活動」「行事」、不安な変化の「登園時」「主活動」「行事」である。2歳児では肯定的な変化の「主活動」、不安な変化の「登園時」「主活動」「行事」「室内あそび」「食事」「散歩」であった。

自由記述を見るとマスクについての記述のほとんどが不安な変化の記述となっていた。「子どもたちが保育者のマスク姿に興味を持ってじっと見つめたり、触ったり、考え込むといったことと、マスクのために口元の様子を見せられない」といった記述であった。

行事については、「いつものように行事が行えなかった」という記述がある一方、「職員同士でねらいについて確認、話し合いをしたことで、行事自体の時間が短縮されて保育の意図は伝わりやすくなった。」など工夫して行えたという記述もあった。

#### ii) 物的環境を通した子どもの育ちの姿〈設問番号（2）④〉

「変化がある」と回答したもののうち半数以上の変化がみられる場面は、0歳児では、肯定的な変化の「主活動」、不安な変化はなし。1歳児と2歳児では肯定的な変化も不安な変化もなし。混合クラスでは、肯定的な変化はなし。不安な変化は「主活動」

「睡眠」「室内あそび」「外あそび」「食事」「行事」「降園」で20%を超えている。その他では、肯定的な変化の「行事」、不安な変化は、回答の半数以上のものはなかった。

自由記述を見ると、コロナ禍でのソーシャルディスタンスを、できる限り確保しようと努力されている様子がみられる。「遊びが密にならないように環境構成を考え直した事で子どもが集中して遊んでいる」という肯定的な記述が半数を超えている。その反面「他学年との交流があまり出来ないことで、異年齢交流が減り、子ども同士の学びの場が少なくなった」といった心配な記述があった。

### iii) 子どもが集中して遊びこむ姿〈設問番号(2)③〉

「変化がある」と回答したもののうち半数以上の変化がみられる場面は、0歳児では肯定的な変化の「登園時」「主活動」、不安な変化はなかった。1歳児では肯定的な変化の「室内あそび」、不安な変化はなかった。2歳児では肯定的な変化の「食事」、不安な変化はなかった。混合クラスでは肯定的な変化の「主活動」「室内あそび」「外遊び」、不安な変化は「行事」「食事」である。その他の肯定的な変化の「主活動」「行事」「室内あそび」「外遊び」「食事」、不安な変化はなかった。

自由記述を見ると、自由記述21件中の16件が肯定的な変化の記述であった。実際の記述では「物的環境を見直すことで、子どもの主体性を大切にしたい保育をより考え工夫することができるようになった」という肯定的な変化の記述や「パーティーをすることで、今までは誰とでも自由にあそんでいたことが、クラスで分けたり、玩具の制限をせざるを得ない状況となった。子どもの創造力に影響がないか、また、社会性を育てていく中で、人との関わりが制限され、影響を心配している」といった不安な変化の記述があった。

## (2) コロナ禍における援助の工夫

### i) 物的環境の設定〈設問番号(2)②〉

0歳児、1歳児、2歳児、混合クラス、その他の中で「変化なし」は0歳児、2歳児、混合クラス、その他であったが、1歳児保育者だけが肯定的な変化が数パーセントあった。

1歳児保育者の自由記述を見ると、水洗いができるプラスチックの玩具にしたり、いままで共有していた物（椅子等）が個人用になったりと、今まで当たり前に行ってきたことを再確認する良い機会になったのではないと思われる。

### ii) コミュニケーションの取り方〈(3)①〉

グラフから「登園時」「主活動」「食事」「室内遊び」「降園時」は、どの年齢においても不安な変化が感じられている。自由記述を見ると、マスク着用をしているため表情がわかりにくかったり、声かけもマスクの中に声がこもるため子ども達への伝わりにくさを感じている。そのため、目で感情が伝わるように目をよく動かすようにしたり、声のトーンを変えたり、目と目をしっかり合わせてかかわったり、また、ジェスチャーを大きくしたりといった伝える工夫を行っている。特に「食事」の場面では、保育者の口の動きなどを伝えるために透明のマスクやフェイスシールドを使用するなどの工夫が見られた。

### iii) 保育者と子どもの応答的関わり〈(1)②〉

0歳児クラス、1歳児クラス、混合クラス、その他の中で「変化なし」と回答したのが0歳児、1歳児、混合クラス、その他であった。2歳児だけが不安な変化がわずかではあるがあった。

自由記述では、1歳児の保育者は「子どもたちの表情を細かく見ることに注意が行くようになった。」「食事の際、子どもと保育者の食べる時間を分けることにより、以前よりていねいにかかわることができた。」というものがあつた。

また2歳児の保育者の自由記述を見ると、「給食は黙食が基本なので、食事の感想を言い合う機会が減った。」「給食を一緒に食べることで得られるマナー等が、伝えきれないところもある」などがあげられた。

### iv) 言葉かけに使用する語彙の変化〈(3)②〉

「主活動」「食事」「室内遊び」「散歩」「行事」は、特に混合クラスにおいて不安な変化が感じられている。特に「食事」の場面では、「カミカミ・ゴックン」など言葉で伝え、行動を目で見て真似をするという一連の動作から習得していくが、言葉だけでは伝わらないもどかしさを感じている。2歳児くらいになると日々の積み重ねにより、言葉と目の表情から読み取れる力がついて来ていることもうかがわれる。「散歩」については、感染防止の観点から行っていない園もある。また、「行事」なども縮小や開催を見あわせたり、それぞれの園で検討を繰り返してきている。「コミュニケーション」の項目と同様に細やかな言葉かけや絵本の読み聞かせ、わかりやすく声のトーン、発音などコロナ前より意識しての保育を行っているようである。

v) 言葉以外の動作の変化〈(3)③〉

「排泄」「睡眠」「室内遊び」「外遊び」「散歩」「行事」「降園」で特に混合クラスにおいて不安な変化を感じられている。ただ、自由記述を見ると身振り手振りをコロナ以前よりオーバーにジェスチャーするようにしたり、絵本を読んだり、話をする時にも大きな声でゆっくりしたり、保育者自身も伝達の工夫をするようになったとの記述があった。また、子どもの方もマスク着用の生活に慣れてきており、自ら体で表現しようとする姿も見られるようになったとの記述もあった。これらの自由記述からコロナ禍におけるマスク着用の弊害もあるが、この数年間に子どもも保育者もこの現実を受け止め、表情の読み取りなど、日々の保育の中で意欲的に取り込もうとする努力をしている様子も伺われる。

(3) 保育業務の変化や工夫〈記録や研修、学び方等〉

i) 保育者が行う物的環境の準備、片付け方等〈設問番号(2)①〉

「登園時」「睡眠」「室内遊び」では変化なし、肯定的な変化に多く回答されている。

「主活動」「食事」では、混合クラスは不安な変化または両方の変化にかけて多く回答している。他の年齢は変化なし、肯定的な変化に多く回答があった。

「排泄」「外遊び」「散歩」では、変化なしに多く回答している。

降園時では、変化なし、肯定的な変化に多く回答しているが全てのクラスにおいて不安な変化の割合もある程度みられる。

年齢別に読み取ると0歳児は肯定的な変化の意見が多く1歳児、混合クラスは他年齢に比べると不安な変化が多い。2歳児は肯定的な変化の意見が0歳児の次に多い。管理職は外遊び以外は肯定的な変化の意見が多い。

自由記述を見ると、「玩具の消毒を頻繁に行うようになったが除菌機械の活用により消毒の時間が短縮された。」「毎日の消毒の中で玩具の破損箇所を見つけることができ、点検にもつながっている。」「消毒作業に費やす時間が多く職員の負担が大きい。」「消毒のしやすい玩具のみ使用してしまう。」「席を対面にならないよう留意し、対面になるときはアクリル板を設置する。」「密にならないよう少人数での活動を増やしコーナー分けを充実させた。」「

睡眠時、隣同士間隔を空けたり向きを交互にするなど工夫を行った。」「布おむつから紙おむつに変更したことで感染病予防にもつながった。」「行事の見直しを行い、園でしかできない体験や経験を取り

入れるなどの工夫を行った。」などがあった。

ii) 記録の変化〈設問番号(3)④〉

全体的に肯定的な変化の意見が多い。混合クラスは不安な変化が他学年より多い。

自由記述を見ると「子どもの育ちが保護者に伝わるよう玄関に写真を多く掲示するなど工夫を行っている。」「ICT化が進んだ。(連絡帳、写真や動画の配信、保育の記録)」

「消毒作業に時間を多くとられるため、日々の記録を簡素化することができた。」などがあった。

新型コロナウイルス感染症の大流行がICT化の進むきっかけになった。また、人手不足を解消するため、様々な機械の導入を進め、保育者の仕事の負担の軽減につながっているのではないかと感じた。

iii) 情報共有の方法〈設問番号(1)③〉

「変化なし」が多い傾向にあるが、情報共有の項目に関しては肯定的な変化または不安な変化の意見が多く、良くも悪くも変化の多い項目であった。

自由記述を見ると、「業務連絡や子どもの様子について伝達の仕方がスムーズになった。また、SNSを活用し時間の使い方を工夫するようになった。」「情報共有にズームを使い、集合型の話し合いを減らしている。」「情報共有に漏れないようメモをとったり、互いの体調を気遣ったり職員同士の会話が増えている。」という意見がある反面、「マスクで表情が読みづらい」「他クラスとの連携が少ない」「クラスで課題を持ち込んでしまう」など肯定的な変化と否定的な変化に分かれた。

保護者との情報共有、職員間の情報共有の中で出来ることを模索しながら、情報を伝え最善のことを行っている園が多くみられた。

iv) 保育技術の学び方〈設問番号(3)⑤〉

肯定的な変化として、「リモートという選択肢ができ、自ら選んで研修に参加したり、自宅で参加出来るようになった。」「リモート研修がほとんどであり、会場への移動時間がなくなり時間的負担が軽減された。また、他県の研修にも参加出来るようになり研修の機会が増えた。」「

不安な変化として「オンライン研修が主流になったことで研修の中で意見交換やグループ討議が難しくなった。」「また、「実践的な研修ができない、対面研修の方が理解しやすい」という意見もある。



### 3. 考察

集計結果を受けて、先ず変化についての根拠、原因について述べてみる。

「変化なし」が多かった理由としては、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改正によって、保育内容や保育実践の方法の見直しが進んでおり、各施設において改善活動による取組が実施されていたことが考えられる。国や地方公共団体、保育団体等によるマニュアルやガイドラインの提示、研修会の実施等により、様々な取組が継続的に進められてきたことによる効果があったものである。

新型コロナウイルス感染症に関する様々な状況の変化に相対する保育者が感じている肯定的な変化には、新型コロナウイルス感染症への対抗のための取組であっても、今後の保育の質の向上につながるものだと認識されたものもあった。

一方で不安な変化については、これまでの改善の取組とはまったく違った対応が求められたり、更に時間と手間が取られる対応が求められ、困惑している様子が自由記述から窺える。

肯定的な変化と不安な変化が両方とも内在しながら、求められる対応が保育現場において有効なのか、感染を防げるといった確証が得られない中で、不安と葛藤を抱きながら、保育を継続していこうとする推進力や指向性が保育の現場にあることの一端が示されたものである。

乳幼児の発達（特に内面的、心・情緒・言語）という側面から、新型コロナウイルス感染症により子どもたちがどのように成長しているのか、どのような現状なのか、自由記述から読み取ってみる。乳幼児の発達は、今までの私たちの保育環境に対しての実証研究結果からも、3歳未満児にとって、人的環境、物的環境などは成長には必須であると言うことが実証されている。また先行事例等からも分かるように全ては0歳からの積み重ねであり、その重要な時期にマスク生活を強いられ、表情の読み取りや言葉がはつきり聞き取れない状況では、心と脳の発達も危ぶまれるのではと危惧される。人間は人との対話を経て知を獲得していくものであり、感情表現や言語の獲得等も環境との相互作用で成長していくと論じられている。コロナ禍の中、ベールに包まれた霧の中で、保育者が目の前の子ども一人ひとりのために最善の利益を考え、実践をしたとしても、アンケート調査からも分かるように衛生面においては感染予防を考慮し、こまめな玩具の消毒、密の回避のため様々な改善がされたことは実証されている。ま

た少人数制や分散保育をすることで接触制限を図り、行動・活動規制が余儀なくされたことで経験値不足が心配なところでもある。反面、少人数制のため、一人ひとりに丁寧な関わりが出来たこと、コロナ禍を通して子ども達が消毒の仕方を覚え、ダイナミックな活動はできないものの、指先を使った細かな遊びができたこと等が上げられている。物的環境面では、保育者のかかわりで解決できている。すなわち行為者が保育者であり対象者（物）がすべて子どもであることから、保育者の専門的対応で以前と同じ状態を保つことができた。ただ豊かな生活経験・体験から獲得していく、言葉や表情の読み取り等々はいずれにしても、発達に何らかの影響を与えているという懸念がぬぐえない。

### Ⅲ. 調査結果のまとめと考察

#### 1. 3歳未満児の保育で大切にしたいこと

##### 1) 調査から明らかになった事

新型コロナウイルス感染症の感染対策として、「密閉、密集、密接」の3密を避けることが求められ、それぞれの園の日常としてこれまでに行ってきた教育・保育を変えざるを得なかった部分があることは、否めない。自由記述にもみられるように、肯定的な変化と、不安な変化の両方の変化を感じながら、感染対策として、日常の保育を多少なりとも変えざるを得なかったことが見られた。その状況に応じながら、日常の保育を守るために、子どもたちの笑顔を思い浮かべながら、保育者同士が、振り返り、見つめなおし、問いかけつつ、眼前に差し迫った選択を続けてきていることが、実態として見えてくる。自由記述を引用すると「職員同士でねらいについて確認し話し合いをしたことで、行事自体の時間が短縮されても保育の意図は伝わりやすくなった。」「遊びが密にならないように環境構成を考え直した事で子どもが集中して遊んでいる。」「物的環境を見直すことで、子どもの主体性を大切にしたい保育をより考え工夫することができるようになった。」「子どもたちの表情を細かく見ることに注意が行くようになった。」「食事の際、子どもと保育者の食べる時間を分けることにより以前より丁寧にかかわることができた。」の5点の自由記述からは、個別対応について十分に行えていることが読み取れる。しかしながら、「行事自体の時間が短縮され」「物的環境を見直すこと」「細かく見ることに注意が行く」「食べる時間を分けることにより以前より丁寧にかかわる」を逆説的に思考すると、集団での経験が不足していると読



み取れる。実際に自由記述にも表れており「他学年との交流があまり出来ないことで、異年齢交流が減り、子ども同士の学びの場が少なくなった」「パーティーをするなどで、今までは誰とでも自由にあそんでいたことが、クラスで分けたり、玩具の制限をせざるを得ない状況となった」との回答があった。これらのことから保育者は今まで当たり前に行われていた日常の3歳未満児の教育・保育と、突然コロナ禍になり感染症対策をしながらの教育・保育との緊張感に板挟みとなりながら、心配・不安な心持ちと前向きな思考力が混とんとしながらも様々な視点から工夫を続けている様子が伺える。

## 2) 考察

今回の研究結果から見てくる3歳未満児の保育について特に大切にしていきたい保育とは、保育の環境を一人ひとりに応じた設定にできるかどうかである。コロナ禍であっても、基本的には日頃より各園で大切にしている保育を行う努力がされており、子どもの育ちに対し一人ひとりの発達や発育について把握し、それぞれに応じた環境設定を行っていた。これは、コロナ以前と変わらずに今まで通り行われてきている。ただし、感染対策により、マスクを着用しての保育の影響で、顔の表情から読み取る力や、友達や異年齢児とのかかわりに制限があったために、自分以外の人からの刺激が少なくなっていたことが、この先どのように影響するのか危惧されるところだ。

保育の工夫を行ってきた中で、浮かび上がってきた肯定的な変化、不安な変化を心に留めつつ、子どもたちの成長に寄り添い、保育者自身が感じる喜びと同時に違和感を大切にしていけることが必要となると感じている。

そして、今後、教育・保育要領や保育指針を参照しながら、各園のコンセプトを再度語り合い、これまで当たり前だと考えてきたことの内容を、改めて練り上げ、作り上げていく必要があると考える。

## 3) 課題とこれからの保育実践の在り方

制限下での保育では、子ども達の探求心や欲求などは以前と比べても変化がほとんどみられなかったが、環境設定においては今まで通りにはいかないことも多かった。例えば自由記述を引用すると「2歳児については、健康、安全な生活に必要な習慣に気付き、自分でしようとする気持ちが育つなかで、2歳児が保育者を見て感じとり、行動することも増えてくる中で保育者がマスクをして表情が見えなかったり一緒に食べて学んでいくことができなかったり、

保育者の改善だけではどうにもならないことがおこっていると思われる。」「散歩については、感染防止の観点から行っていない。交通ルールを守るなどの生活に必要な経験ができなくなったことは否めない。」とその影響の大きさを示している。その影響が顕著な結果として目に見えてくるのは、今、乳児の子どもが3歳以上児となった時である。

新しい様式としての感染症対策が出来あがったいま、3年前の通りに戻すことは不可能である。個別も経験しながら集団も経験し、新たな様式に影響された3歳以上児への対応を丁寧に行う必要がある。

## 2. 制度改革に提言したいこと

繰り返される感染拡大の発生時期や期間、自治体単位での感染者の割合や拡大状況などにより、感染拡大防止策への影響や取り組みが大きく違う。新型コロナウイルス感染症の第一波が訪れた地域と、訪れていない地域が存在する。現在も危険性はあるが、当初は感染すれば命に関わる病気という認識が基本で、感染拡大防止策は非常に嚴重なものであり、ヒステリックな対応となる感染爆発の地域など、感染者の発生により大きく揺れ動く社会の中で、この時期は感染者が発生していない、もしくは非常に少ない地域も存在した。また、変異株が発生して毒性と感染力のバランスが変わり、結果として日本全国的な対策が進んできてはいるが、逆に一定の感染拡大を経験し経過した地域と、未だ感染爆発への脅威を持つ地域が存在する。新型コロナウイルス感染症が発生以後は切れ目がほとんどなく長期間対策を行なっている地域と、まだ短期間の対策となる地域にも分かれる。この状況下において、行動制限での散歩や戸外活動への影響や、多人数での活動の回避、密を避けるための異年齢での関わりの自粛などに違いが出ている。乳幼児への影響を考察し、制度改革への提言とするうえで、判断する側がその状況下を深く鑑みる必要がある。

コロナ禍における緊急事態宣言や登園自粛などにより、感染症対策を行いながらという緊張下ではあったが、少人数での乳幼児の教育・保育を意図せず体感することができた。この少人数での教育・保育の実践を振り返ると、非日常のストレスである感染症対策がない状態で行われるとするなら、保育者が心身のゆとりをもって子どもたちと丁寧にかかわることができるようになり、子どもが育つ環境は格段に上がると感じられた。

保育者の配置人数、保育室の広さなど、最低基準の見直しについての様々な議論も踏まえながら、今

回の経験を積み上げることで、誰もが学びやすい環境づくりと個人のニーズに基づいた合理的配慮の提供を併用し、公平性の高い乳幼児の教育・保育の環境が整備され、「こどもまんなか社会」の実現につながっていくと考える。そのためにも保育士等の配置基準の見直しが必要であることを、まず1点目の提言とする。園児にとって個別の関わりはむしろ増しているが、集団での育ちや異年齢から受ける刺激や学びが大きく不足している。さまざまな影響下で大人が自己判断で行動することは、どこまでいっても自己責任の範疇だが、就学前の乳幼児を預かる我々は、施設としての判断であり、施設の責任となる。その責務を果たすためにも配置基準の見直しを1点目の提言としつつ、制度改革への提言とするならばコロナ禍の影響での別角度にも目を向けたい。考察の記述において「新型コロナウイルス感染症の大流行がICT化の進みきっかけになった。また、人手不足を解消するため、様々な機械の導入を進め、保育者の仕事の負担の軽減につながっているのではないかと感じた。」と示されており、コロナ禍においてICTの導入が、効果的な改善に繋がるとまではいかないにしても、一定の成果が得られていることは間違いない。人口減少社会の訪れに向けたICT導入より一定の期間が経過している中で、効果の継続を制度としてバックアップいただくため、その内容の改善における費用や更新費用の補助を2点目の提言とする。

最後に、以上のような影響は、未就園家庭にも非常に大きな影を落としている。我々専門家施設においても個別対応が重なる状況において、小さな集まりである家庭ではさらに個別の関わりとなっており、孤立といって差し支えない状況である。今後さらなる大きな影響が出てくることに議論の余地はなく、未就園家庭への教育・保育の専門家による支援は、日本の将来を支える次世代育成の支援として不可欠なものとなっている。国による1日も早い制度化を求め、制度改革への提言とする。

#### IV. おわりに 課題と展望

これまでの私たちのグループで行ってきた研究により、3歳未満児の保育環境において、子どもが生活する環境が発育や発達に影響をあたえる事が検証されてきた。そのようなことから、今回の研究「コロナ禍における3歳未満児保育に関する研究～実態調査から見えてくるもの」で明らかになった事は、このコロナ禍の3年間に行われてきた保育について

の実態が明らかとなり、3歳未満児の保育の環境についての現状やそれに伴う保育者から見た発育や発達などの成長に対する不安についてわかったこと、そしてこれからも子ども達に対して、引き続きコロナ禍の保育の影響について見届けていく必要があることである。

戦後、大規模災害といえるような感染症が発生したことは今までなかった。誰もが経験をしたことの無い環境に突如としておかれた。保育現場で働く人も勿論経験した事がなかった。どのように保育を行っていけば良いのか誰もわからない、教えてくれる人もいない。そしていつまでこのような閉鎖的な状態が続くのだろうか、2022年12月現在、まだ終わりが見えていない。未だに第8波が到来し、そしてインフルエンザとの同時流行での保育が始まろうとしている。今回の研究も、そのような中で行なっており、まだコロナ禍が終わったものでなく感染症の流行化の途中での研究にすぎない。

先行研究において、コロナ禍においての子ども対象の調査や環境についての研究が発表されていた。そこでは、保育の工夫や、コロナ禍の環境についての研究結果があった。今回の研究でも保育者の踏ん張ってきた保育現場、子どもの発達の保障をしようとする手この手で努力してきた事などが明らかにされた。できる限りの密の回避、喚起、消毒、コロナ禍前には考えもしなかった事をしなければならない。そのような中、資質向上のため、園内の情報共有には、IT機器を取り入れたり、今までと違った方法で行なってきた事が見えている。制限のある中でも、陽性者が出てからの休園はあったが予防のための休園をした保育所は基本としてなかったはずである。働く保護者の第一の応援団である保育施設の存在の意義は、大きなものであったと思う。しかしその反面、保育者は医療の専門家でないため、園内での感染にとっても不安を感じ、心が疲弊し押しつぶされそうになりながらもなんとかここまでやってきている。学校は、休校できて、保育施設ができないという矛盾にも耐え、時には、涙を流しながら歯を食いしばって乗り越えてきた。

子どもの育ちについての研究であったが、コロナ禍の影響は、子どもの育ちだけでなく保育者の成長においても3年間の空白はとて大きな影響があった。痛ましい事故や不適切な保育などの一因となっていることは間違いない。保育者としての勤務経験が5年以下の者はコロナ禍以前の経験がほとんどない。5年以上の経験があったとしても3年という期間はあまりにも長く、以前を思い出しながらも新し

い様式に取り組まねばならず、その負担と労力は計り知れない。また、結婚・出産や他業種の経験をスキルとしたいコロナ禍以前の離職からの復帰者は、その労力のあまりにも大きな違いに、年度途中で退職する例が少なからずある。このように過去には戻れない状況下において、配置基準の見直しは必須である。また、このような大規模災害といえるような感染症の発生などに対応できる組織づくりが就学前教育・保育施設にも必要であり、多様化した社会の形成に向けた上級職となる資格の必要性は、喫緊の課題となる。

いまだ終わりが見えない新型コロナウイルス感染症対策であるが、ここまでの3年間に培われた多くの経験や体験、職員同士協力しながら行ってきたという事実がこれからくる第8波にも、また新しい感染症に对应していけるだけの保育を工夫しようとする力が備わってきているのは、今回の研究結果からも明らかだ。

現在厳しい環境下ではあるが、少しだが疲弊を緩和しながらも、感染症と向き合い、共存しながらの保育の確立が見えてきているようだ。保育者は大人であって人生経験があるため、このように不安を感じながらもどうにか新しい様式としての感染症対策を作り上げてきているが、一方で子どもの発育や発達については、決して手放しで喜べるものではない。

アンケートの集計結果から、保育の変化について、以前と同様に変わりがないと答えられている結果が多くあった。しかしそれは、子どもの気持ちや意欲の分野でありそこから育つ心であったり、体である発達や発育とは繋がっているとは言えない。保育現場からも、0歳児の赤ちゃんは殆ど保育者の顔がマスクで隠れており、目と眉だけの顔で、表情からのコミュニケーションや、目で見て獲得していく、口の周りの動かし方、食べ方や、話し方に影響が出ないか。行動制限により、散歩や園外保育の自粛、異年齢児との交流の縮小、子どもの世界がとても狭い環境になっており、その中で生活していて、いったいこのような状況で子どもの育ちの保障は、出来ているのだろうか。今回のアンケートで分かった実態は、コロナ禍が終わった時の実態でなく、あくまでも実際行われている保育で、現在進行形である。結果全てが見えてきたものではない。これからも、子どもの成長を見届けていく必要があるのではないか。今後、もしもコロナが終焉するときに来たならば、どうこれらの問題に向き合っていくのかも、今の内から検討する必要があるだろう。

最後に緊急事態ともいえるこの現状で、子どもた

ちの育ちの保障をするために保育を工夫し、ピンチをもチャンスに変えられる保育現場が日本各地で見られていたこと、それは保育の専門家であるという私たちの誇りがあるからだろう。

#### 参考文献

- ・世古有佳里／「ニューロダイバーシティ時代の大学教育カナダにおける事例と課題」／現代思想2022 vol. 50-12
- ・下里里枝／「保育者のマスク着用が、子どもとのコミュニケーションに及ぼす影響について」／教育総合研究叢書
- ・鈴木暎貴、遠藤隆志、窪谷珠江、他／「コロナ禍が幼児の日常生活ならびに健康に与える影響」／植草学園短期大学紀要第23号～
- ・渡部努／「愛知県三河地域の新型コロナウイルス感染症影響下における保育の実態」／岡崎女子短期大学
- ・野澤祥子、淀川裕美、菊岡里美、他／「保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討」／東京大学大学院教育学研究課紀要第60巻
- ・子どもの生活に関するアジア8か国調査2021～CHILD RESEARCH NET
- ・「空気調和・衛生工学会中部支部学術研究発表会論文集第23号～乳幼児施設における新型コロナウイルス感染症対策と室内環境の調整～田口幸子、青木哲」



別添資料 図1-1 登園時

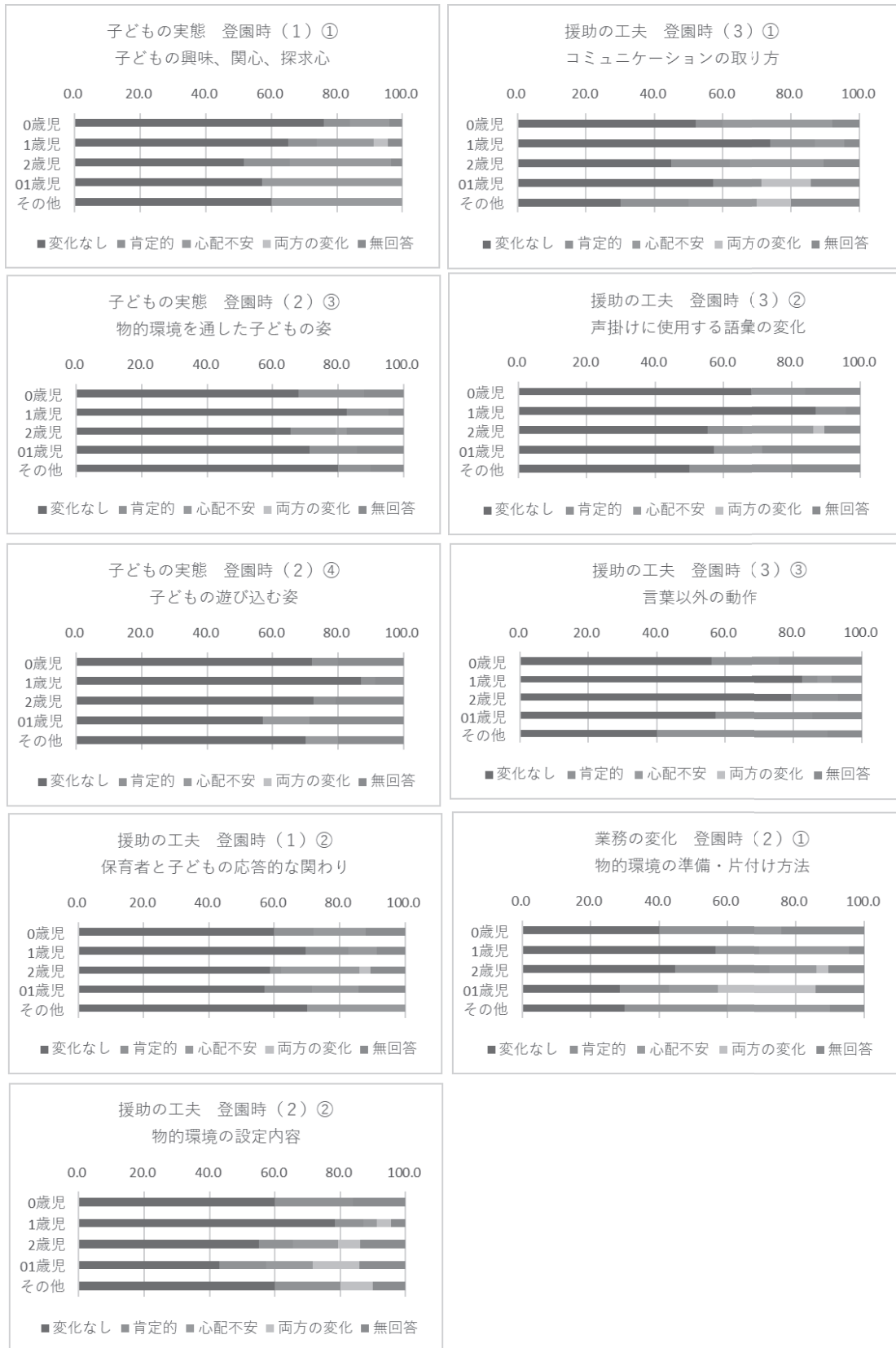


図1－2 主活動

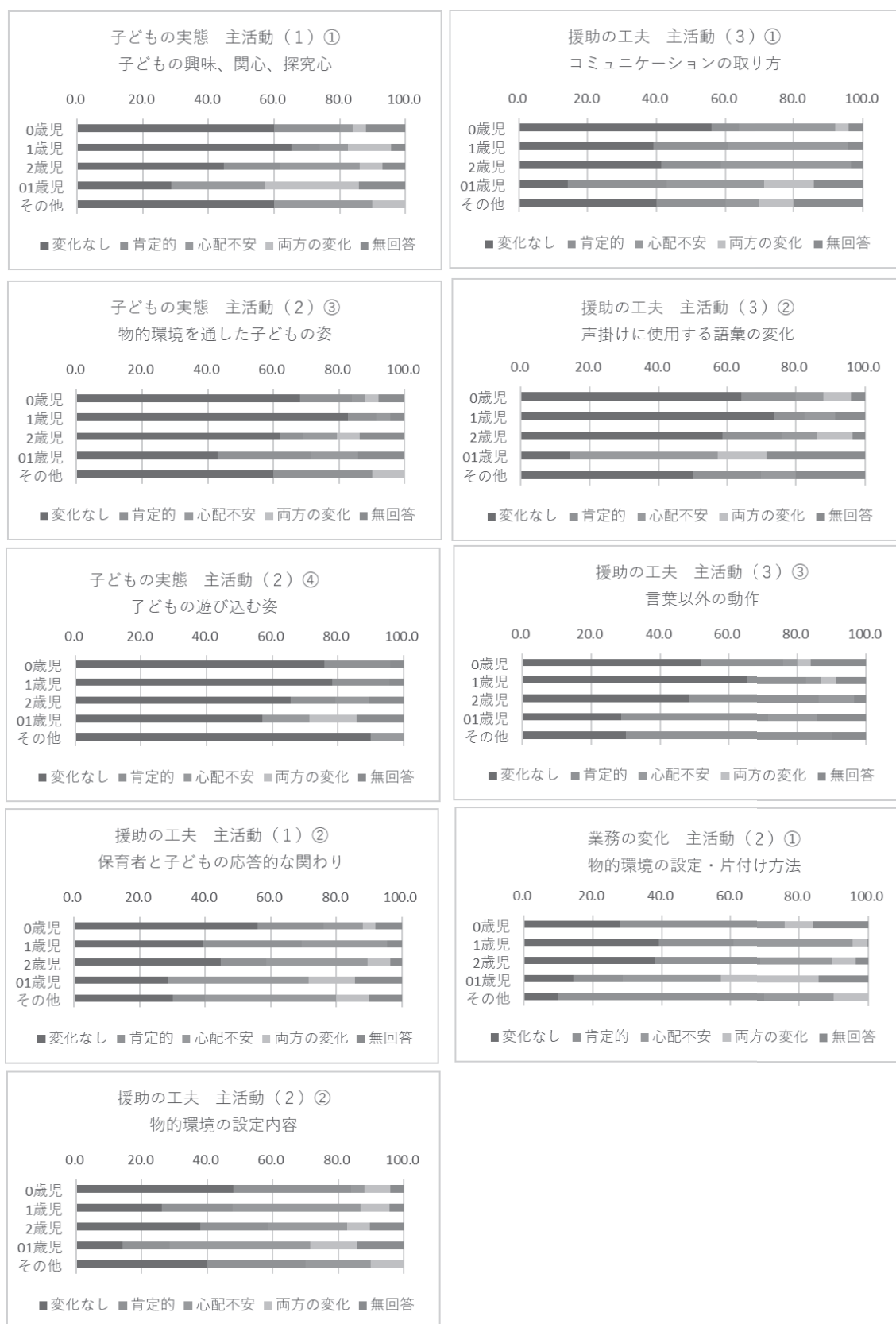


図1-3 食事

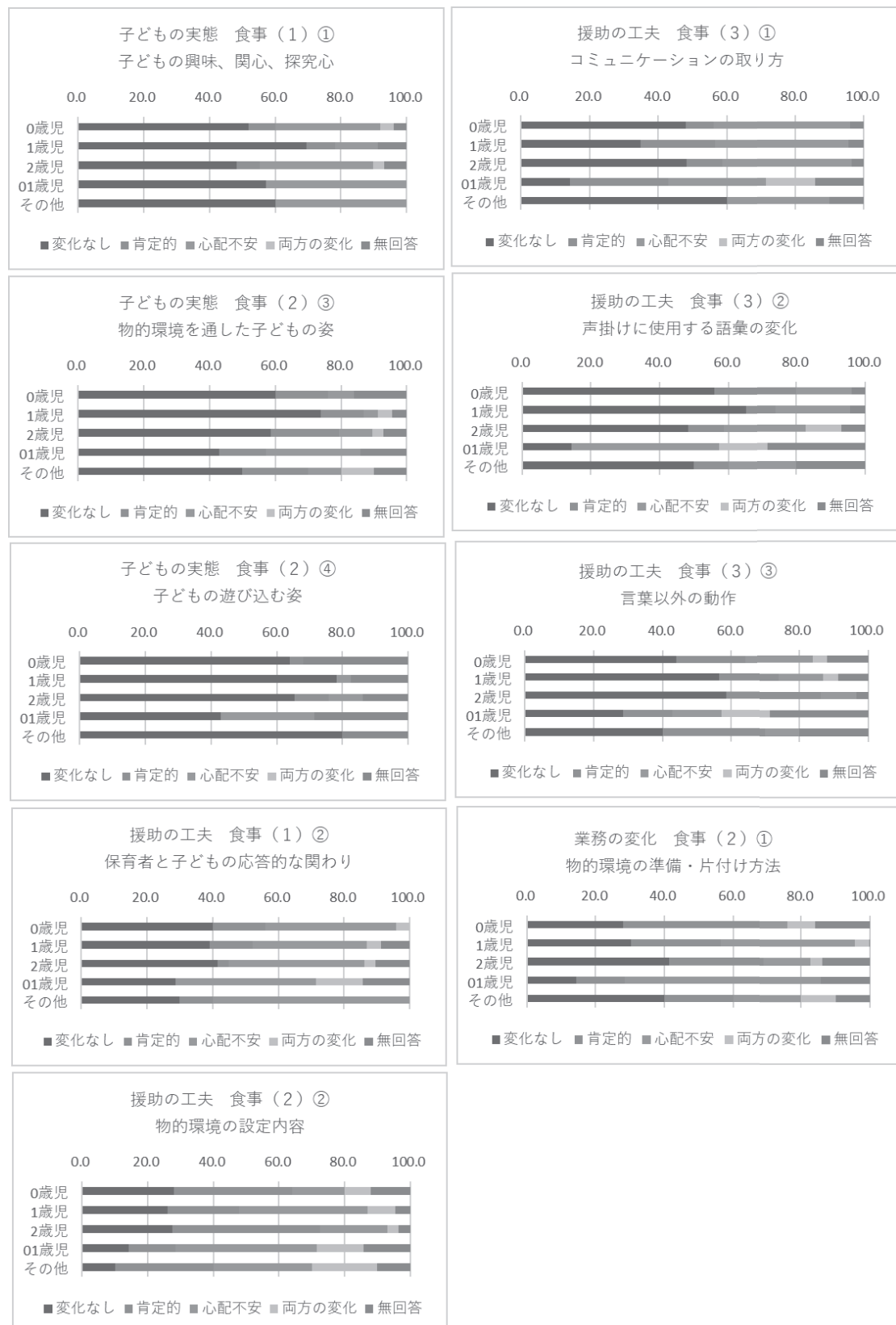




図 1－4 排泄

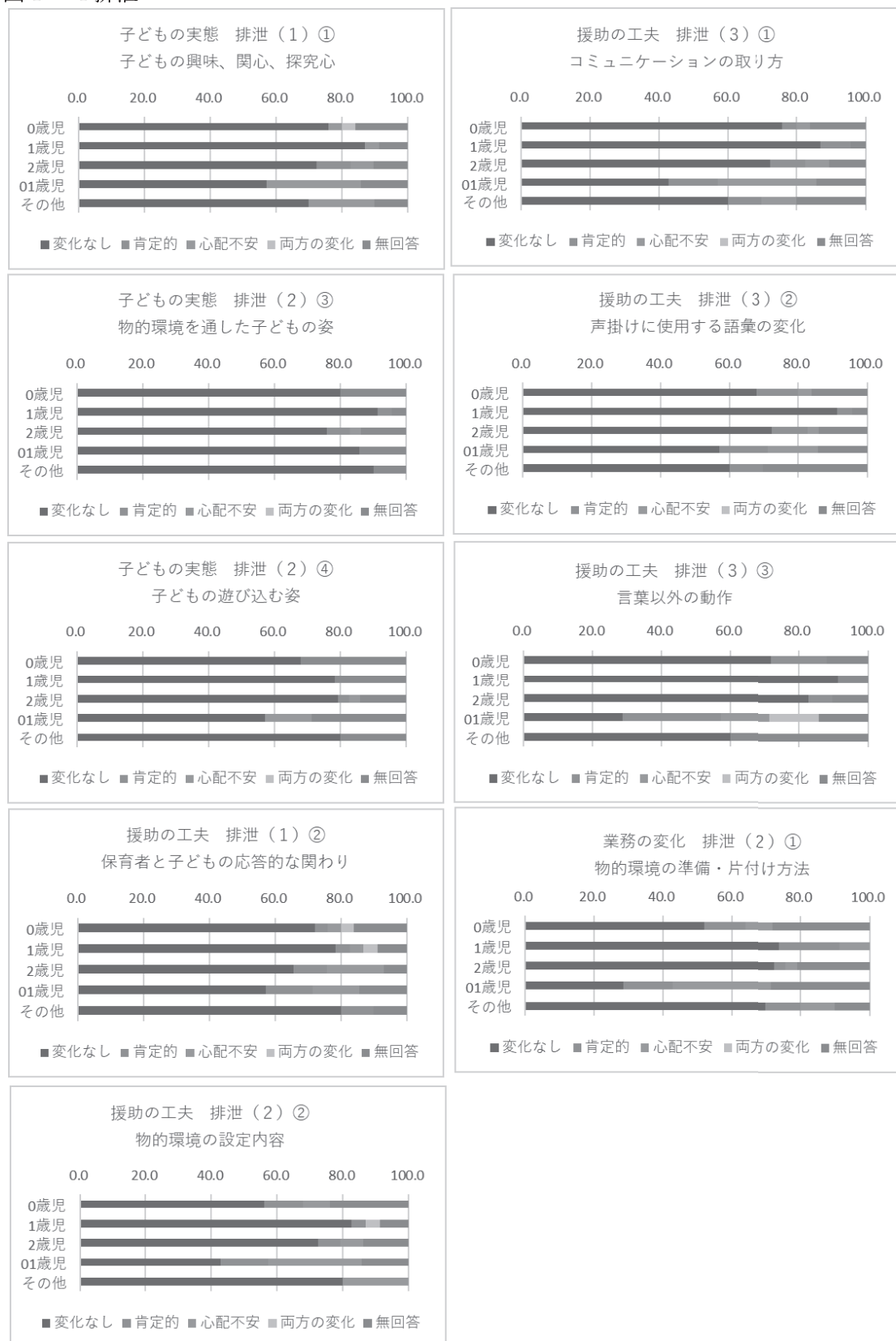


図1-5 睡眠

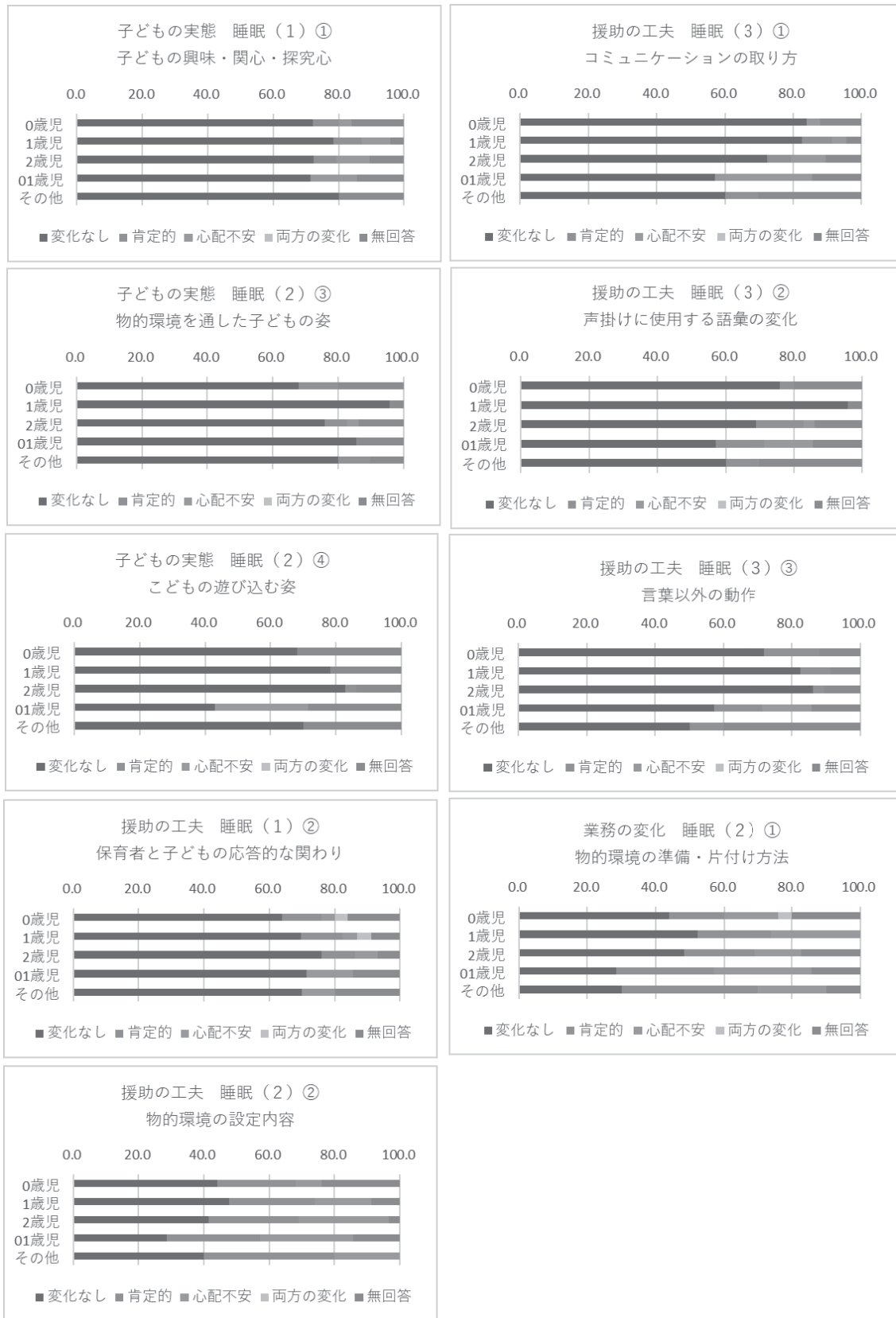


図1－6 室内遊び

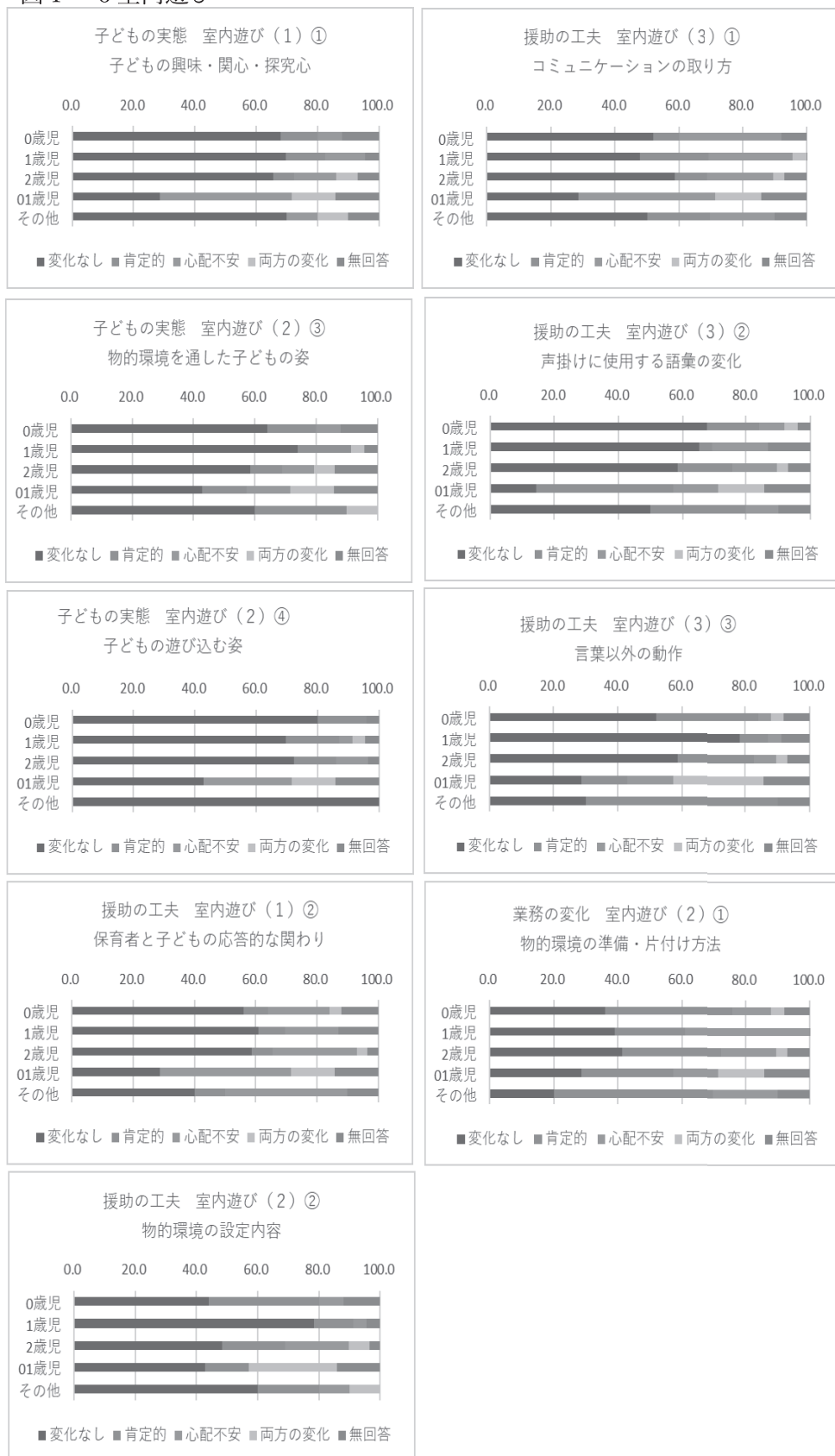


図1-7 外遊び

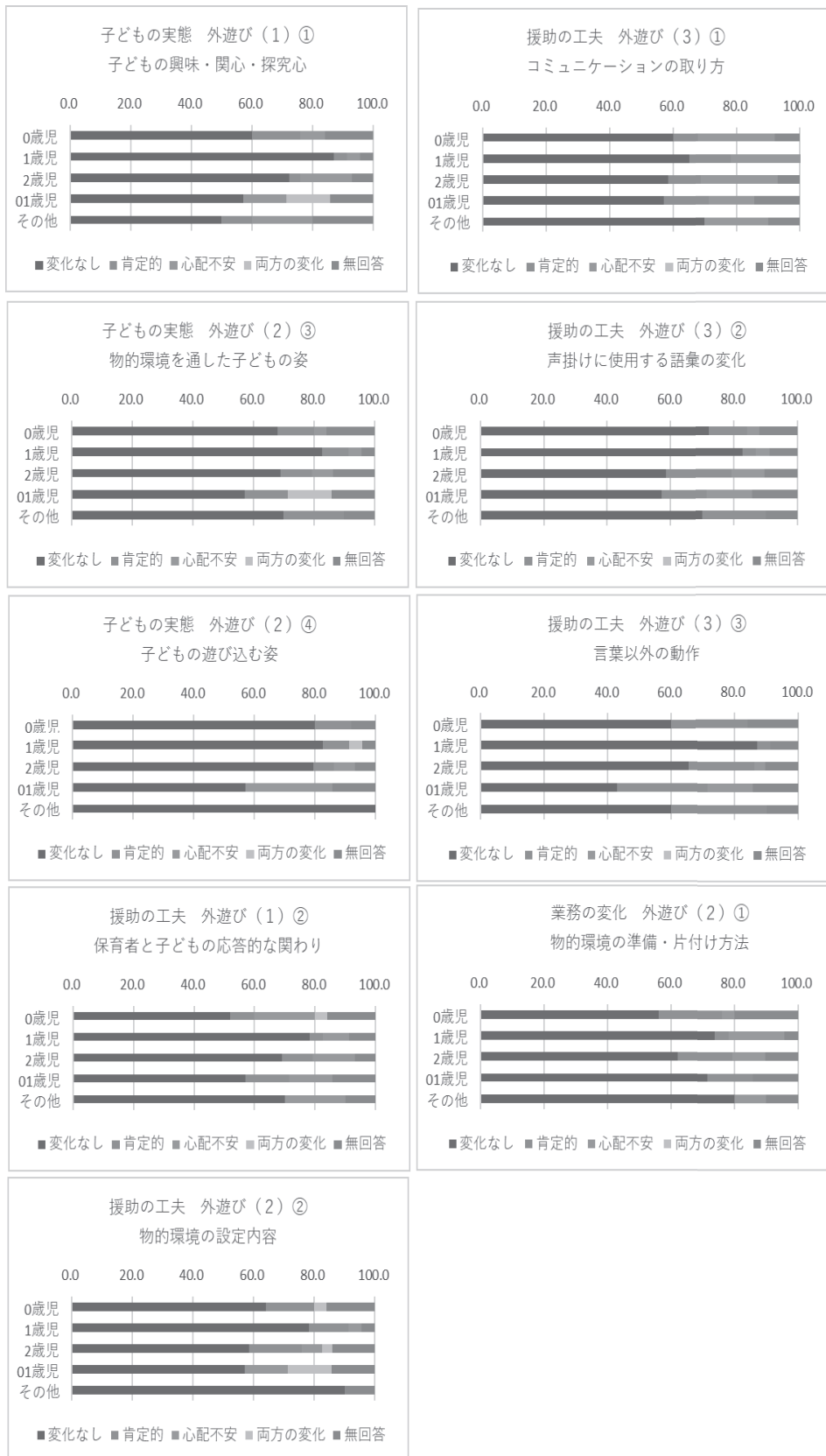




図 1－8 散歩

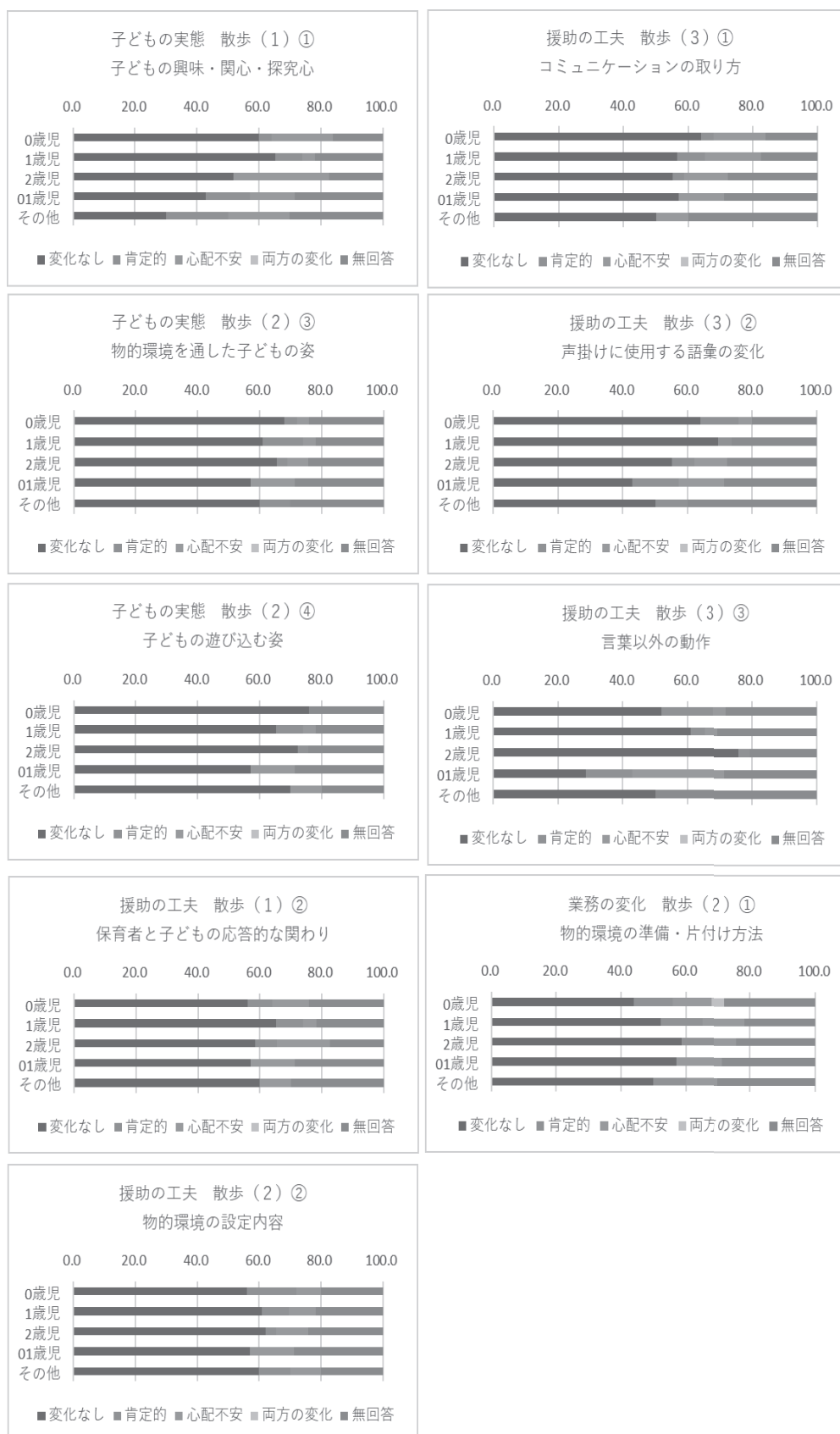


図1－9行事

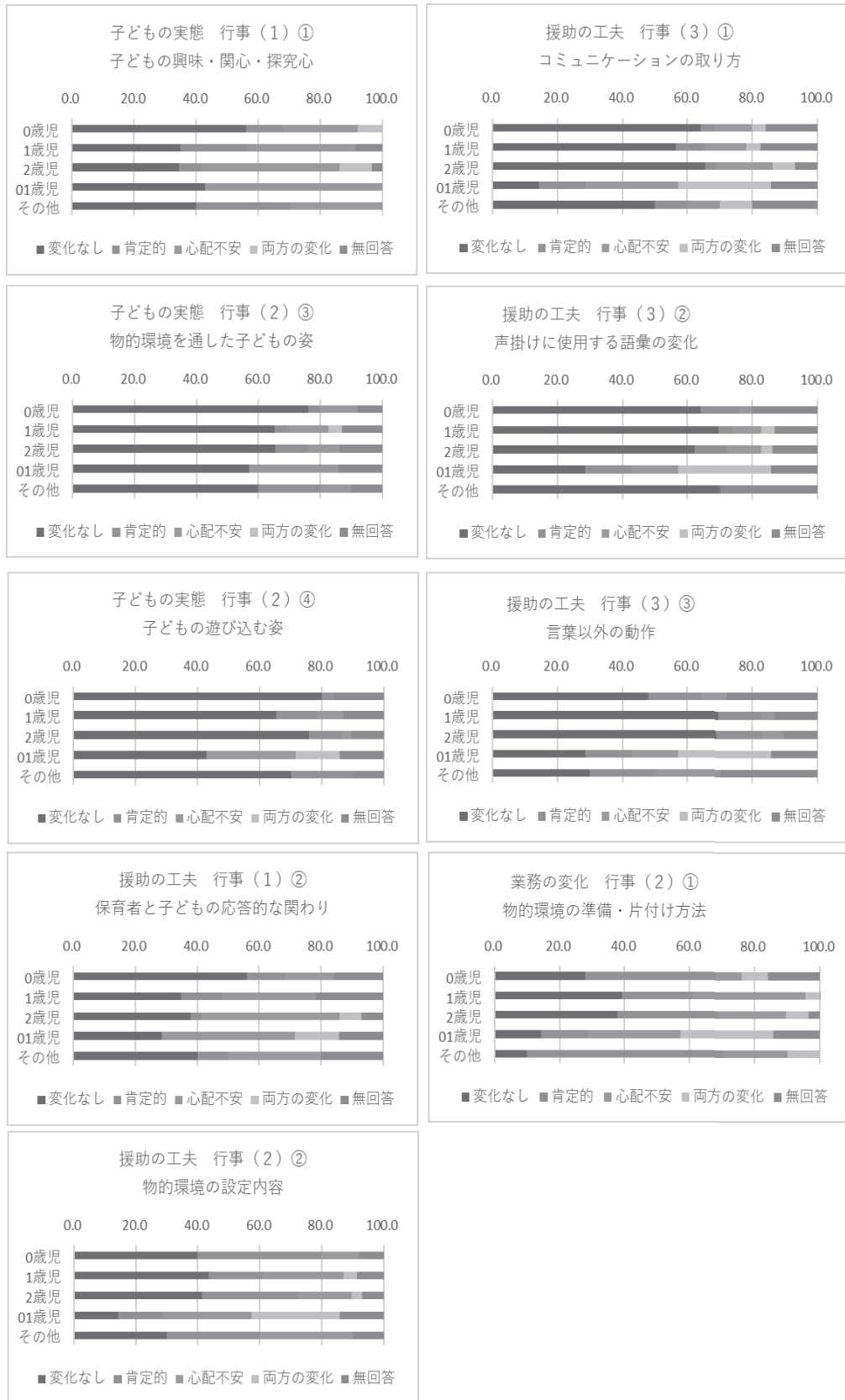


図1-10 降園時

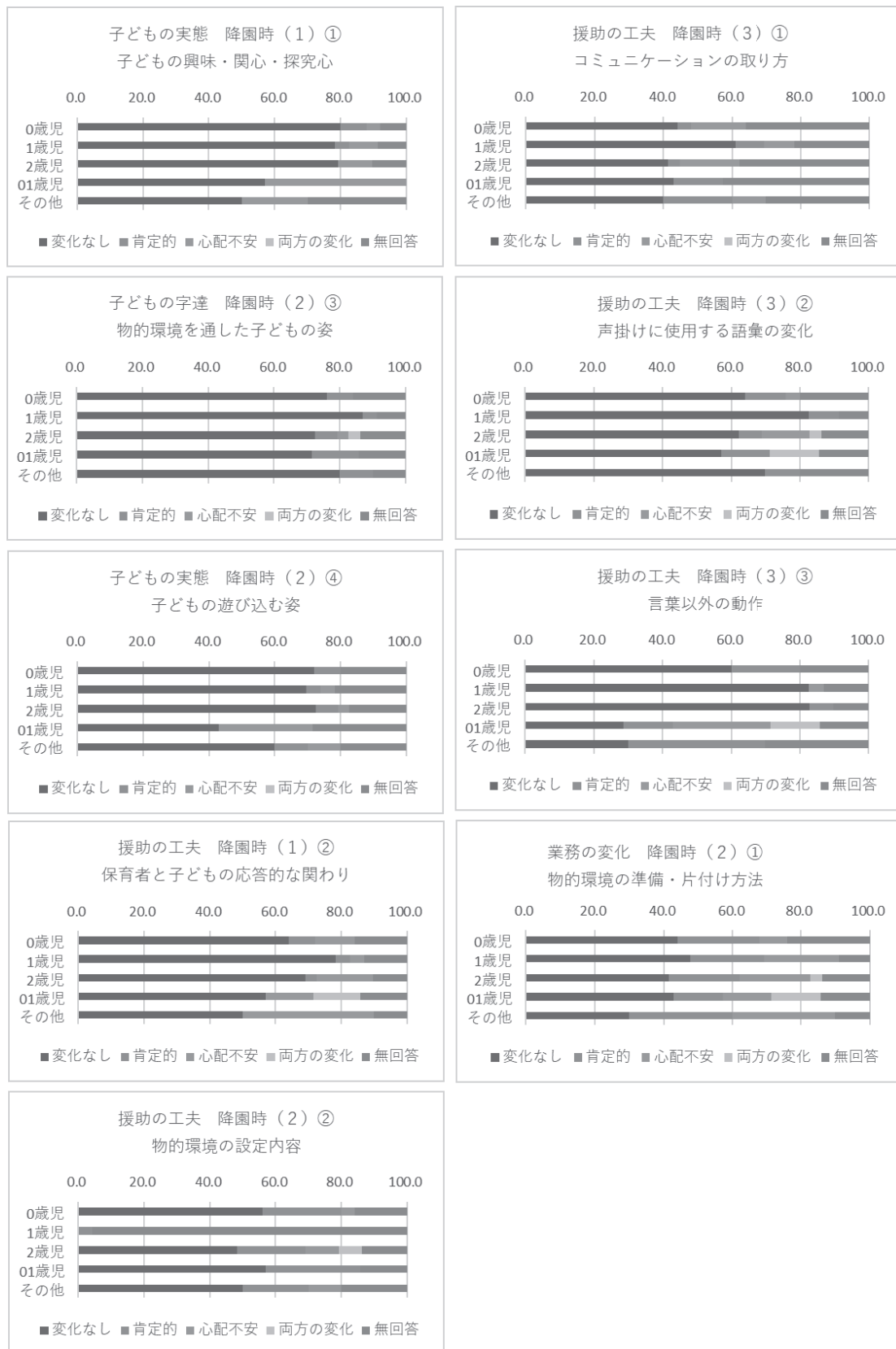


図1-1-1 その他

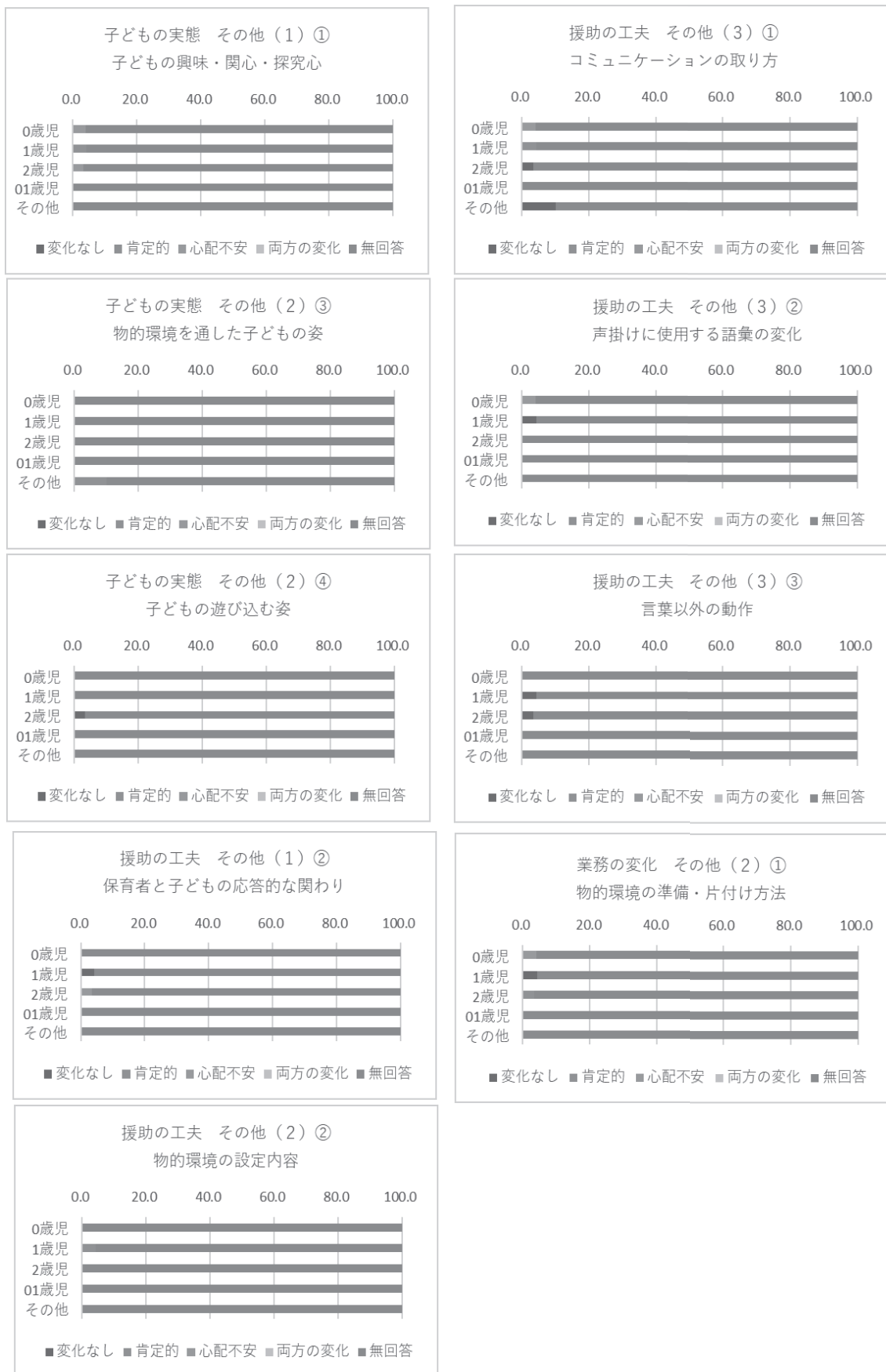
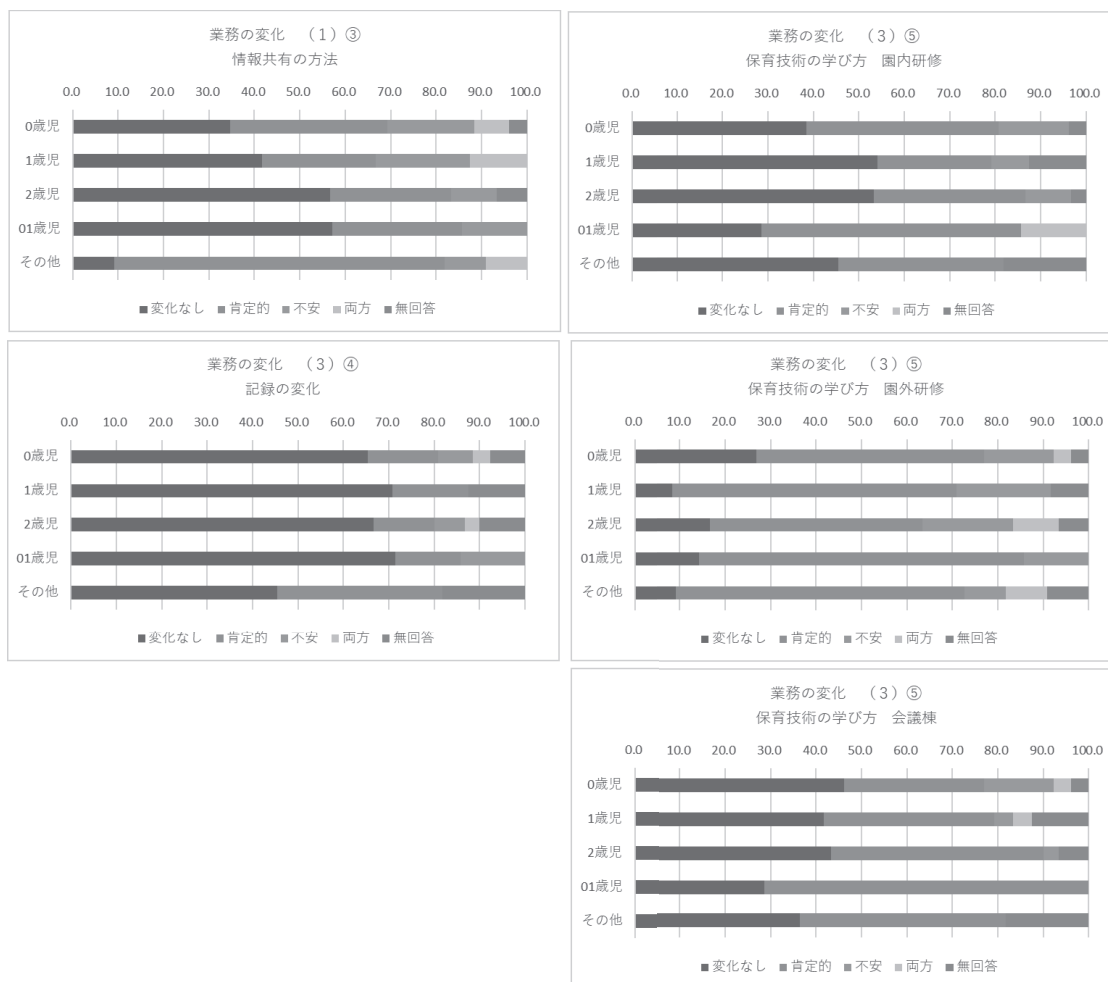




図 1－1 2 業務の変化



※業務の変化は10の場面ではなく業務全体の変化として回答を求めた。